



Shake up

R-15

はじめましてこんにちは、前記担当の恵ネネです。

夏の終わり頃に「たまん叶が見たいよ！」と妙な萌え上がり方をして出すことにしてしまった叶受け年齢制限本です。微妙にタイムラグがあるのがなんとも生々しいです。年齢制限、というわりに私のまんがは生温くてどうしようもなくエロ好きな方にも嫌いな方にも嫌がられそうな気がします…。まあそこは皆川さんに頑張ってもらいたいということで…よろしく！（丸投げ！）

皆川さんと二人誌ってのはじめてじゃない？と思ってドキドキしています。ドキドキしついでにゲストさまを呼んだりして叶をいっぱい拝もうと画策してみました。幸せです。それよりも今はこの本が間に合うかってことの方にドキドキしてるわけなんです。それはトキメキではなくて動悸息切れですが。救心！

ということで、少しでも楽しんでいただければいいなあと思います！

恵ネネ

Pre-

Shake up

この先一步の理由付け ~オレとオマエのABC~
皆川マヒワ

マジかよ！

俺もう絶対
無理だと
思ってたよ

叶んち
送るよう
に
しといたで

めっちゃ
苦労
してんから

悪いな

感謝して
もらわな

飯ッが
出てるで

おー
ありがとな



足りひんな

むぐ？

まだ
食うのかよ

ちやうて

感謝の
気持ち
が
いま
ち
伝
わ
ら
ん
わ

……
ありがとう
ございます？

いやいや、
もっと
態度で示して
もらわんと

な

キス
してんか

はア？

ありがとうの
チューやん

群馬の
常識やろ

クニ
関西へ帰れ
モミアゲ

たあくら
はじくな

※群馬弁？

あ！







古典表現





大丈夫
かよ



キ
コ
ン
コ
ン
コ
ン











そ

そこで
いいつつってん
だよ

…っ
そこでで
自分

もう
抜きっこ
やないで

わかって
もの
言うてる
？



わかってる



く、首…

振らんのも…
たいがいにししいや

こんな…

誰にでも

逆らわへん
やなんて
あかん

俺は
いやや

はっ？





お前のこと
好きかもしれん
と言ってみたら、

じゃなきや
許さねーよ、と
すこまりました。





また夜中に
ランニング
行ったりしなや

え

先発やもんな
浮かれるんも
わかるけど



試合の
前の日になって
イキナリ運動量
増やすようなことは
せん方がええやろ

前かて、

動いとかないと
寝れねーんだよ

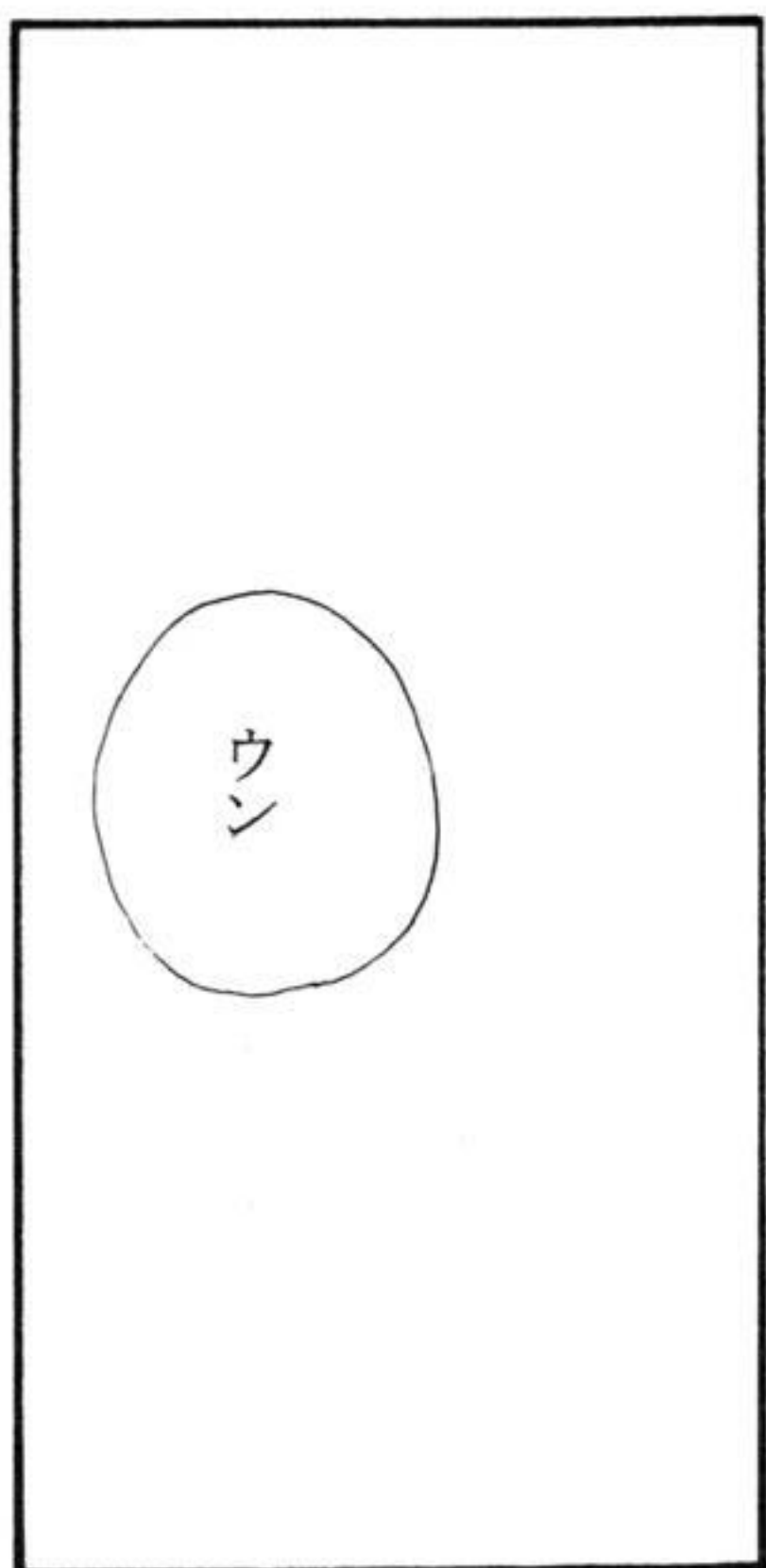


ホォ

叶も
緊張とか
するんやな

興奮して、





ウン



なんや
血イ
のぼっとるんか

？ 抜くん手伝ったろか



……
聞き間違いか
？



ガラ

あ
やっぱり、



ん？

バン
／＼



して

な



ガ
ブリッ



あ

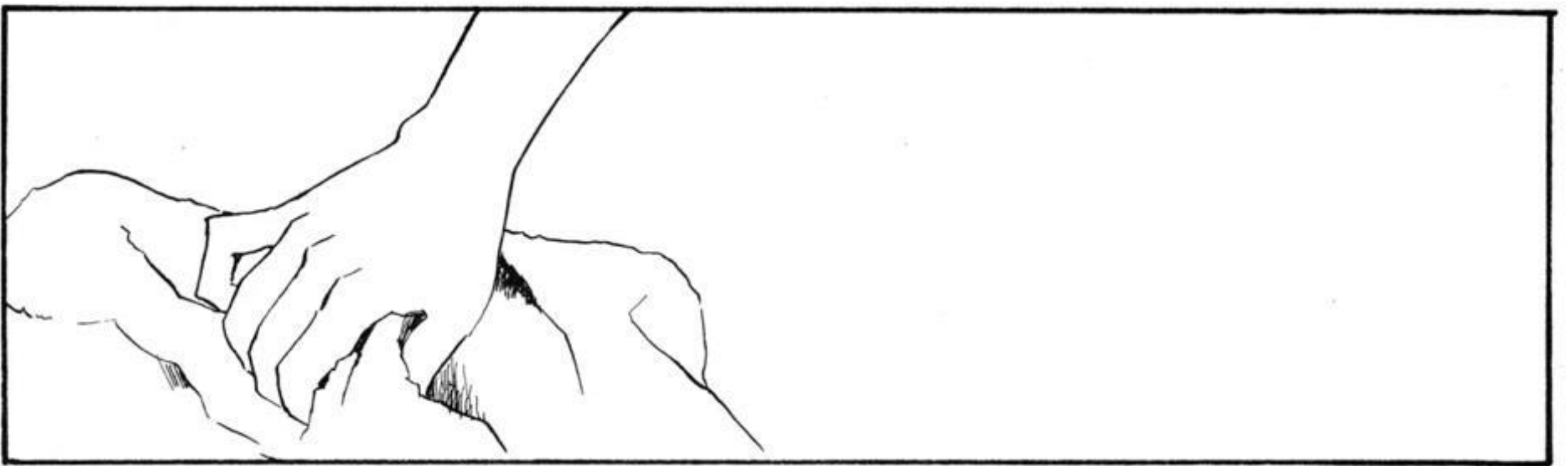
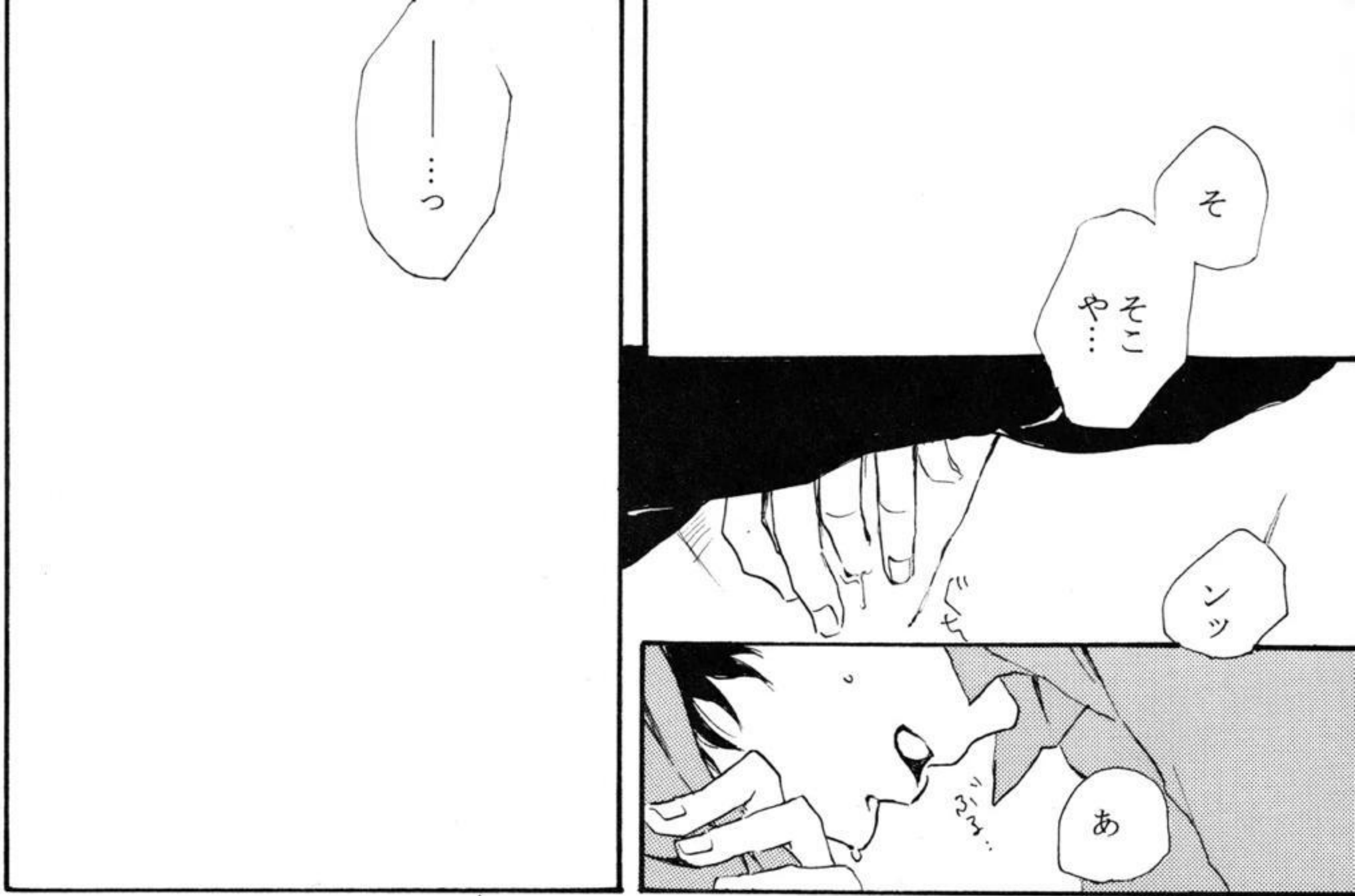
焦った

一瞬
ヤバイこと
されんのかと

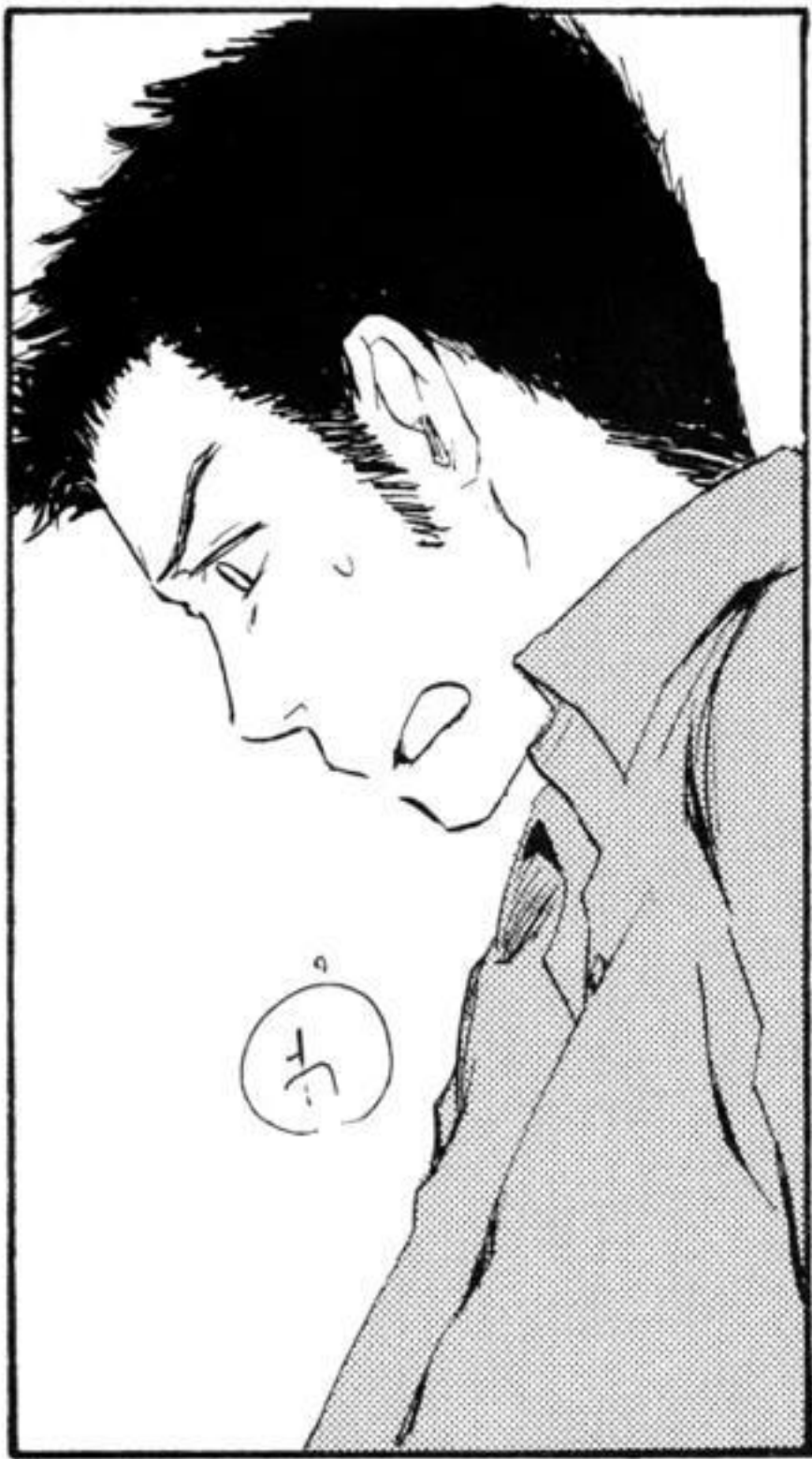
思っ…

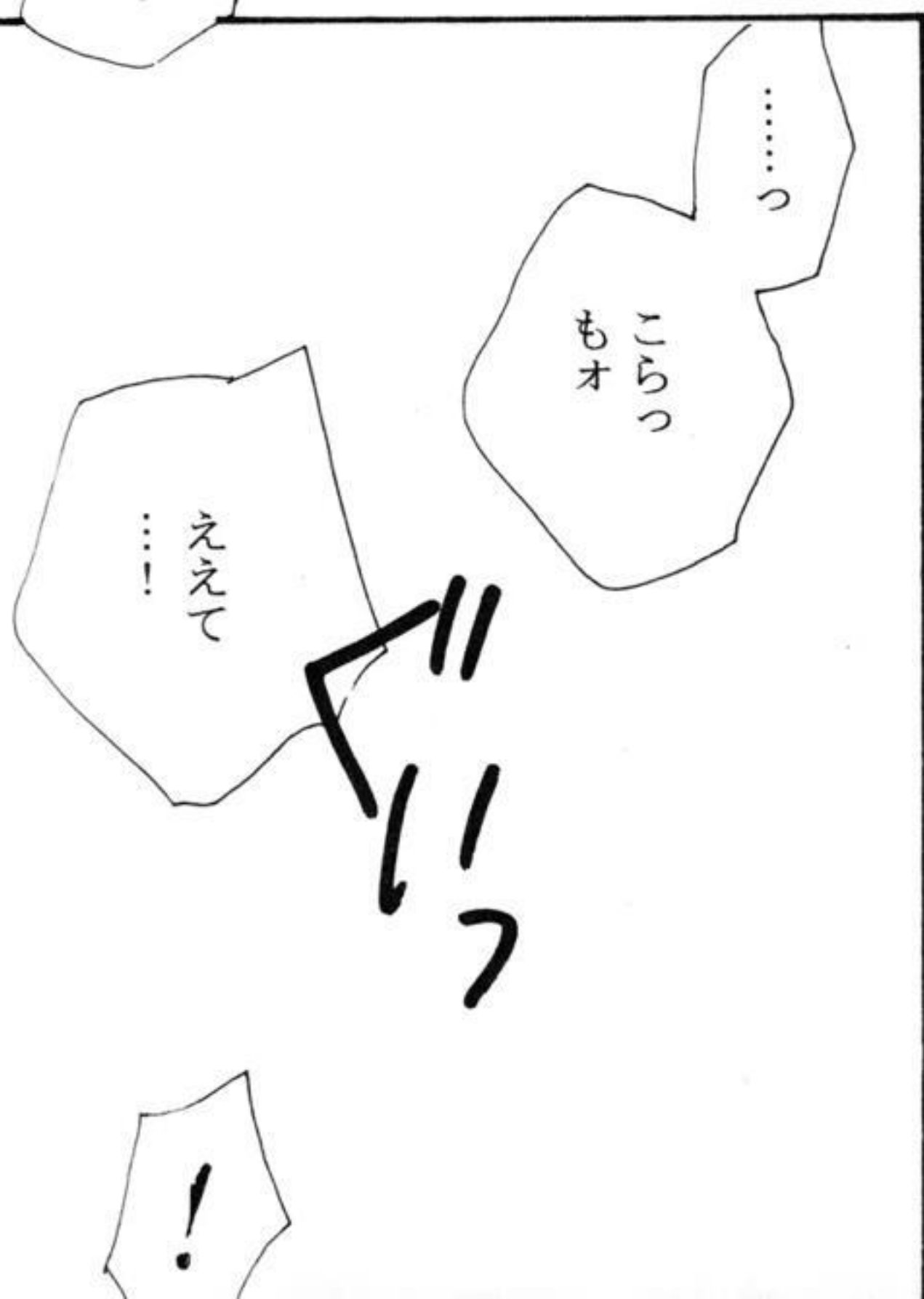
え、

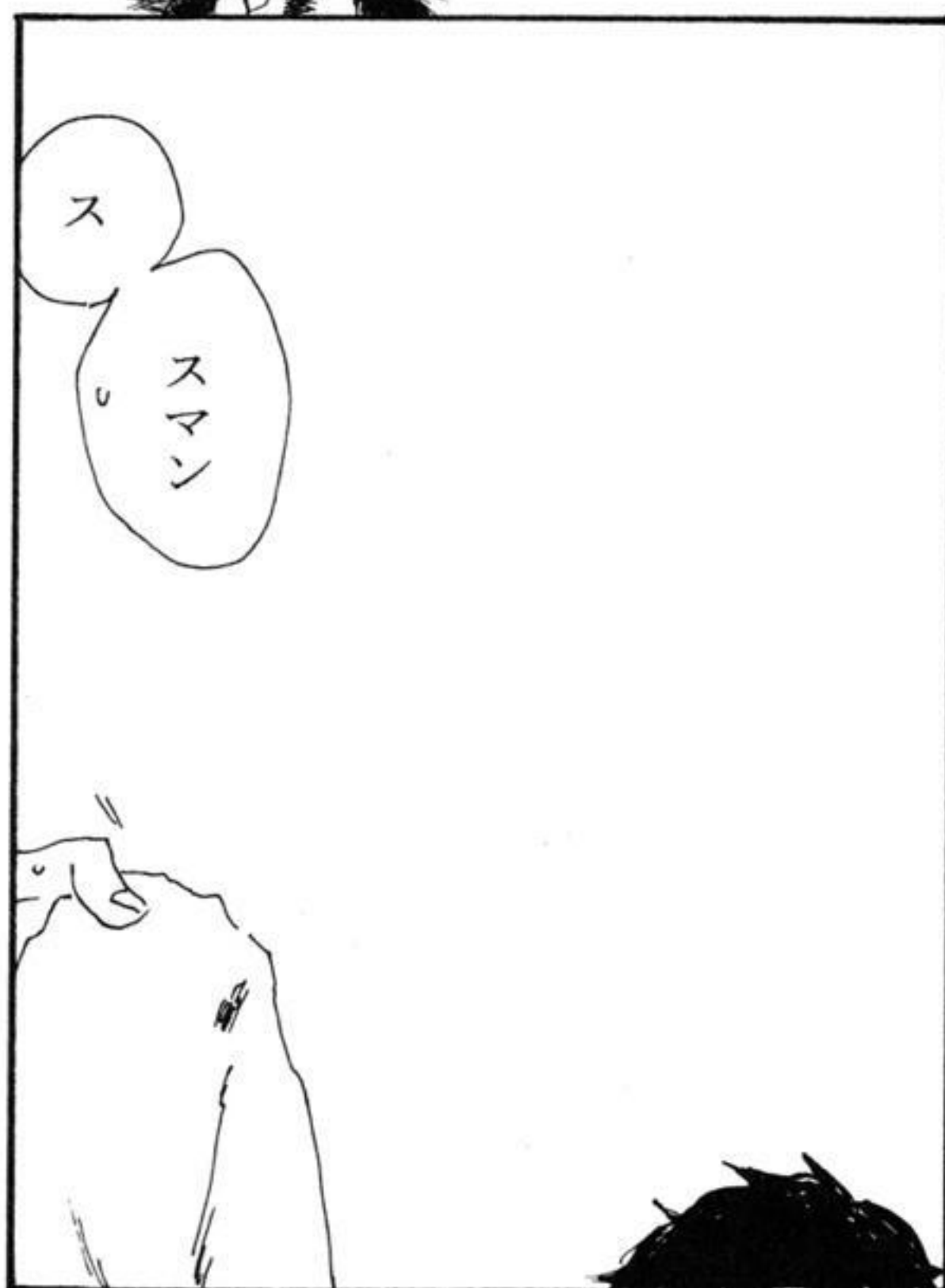




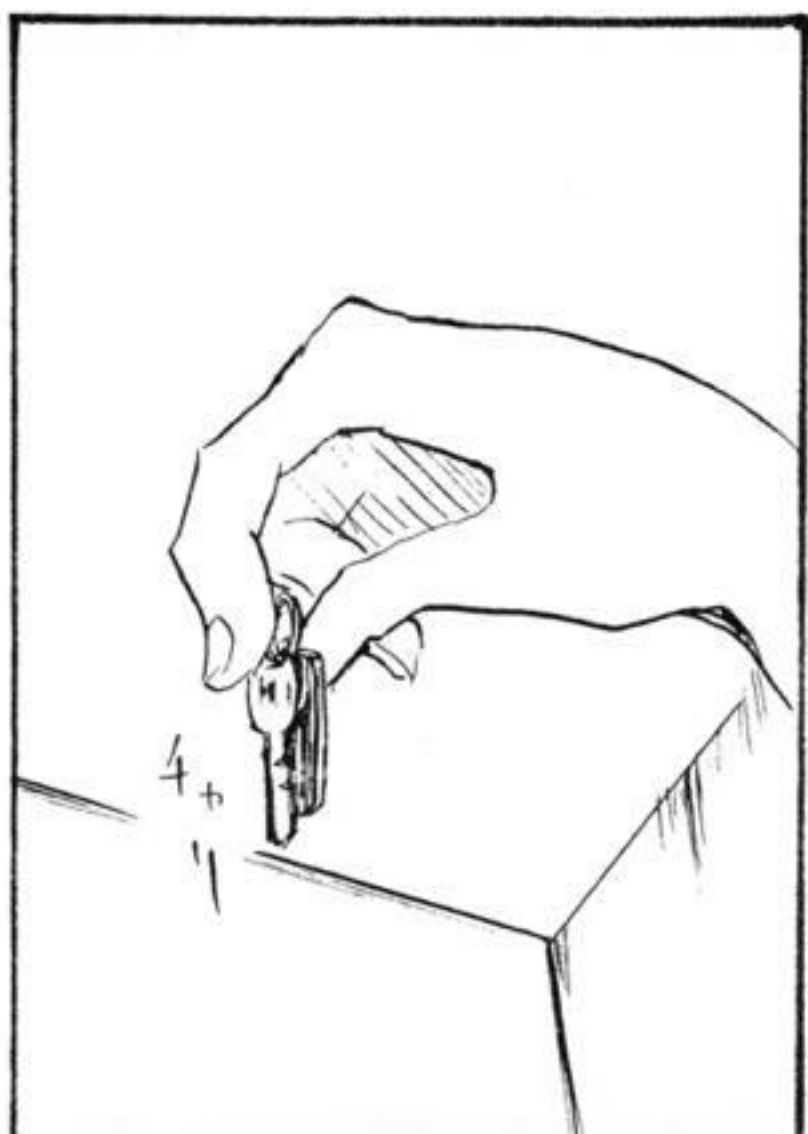
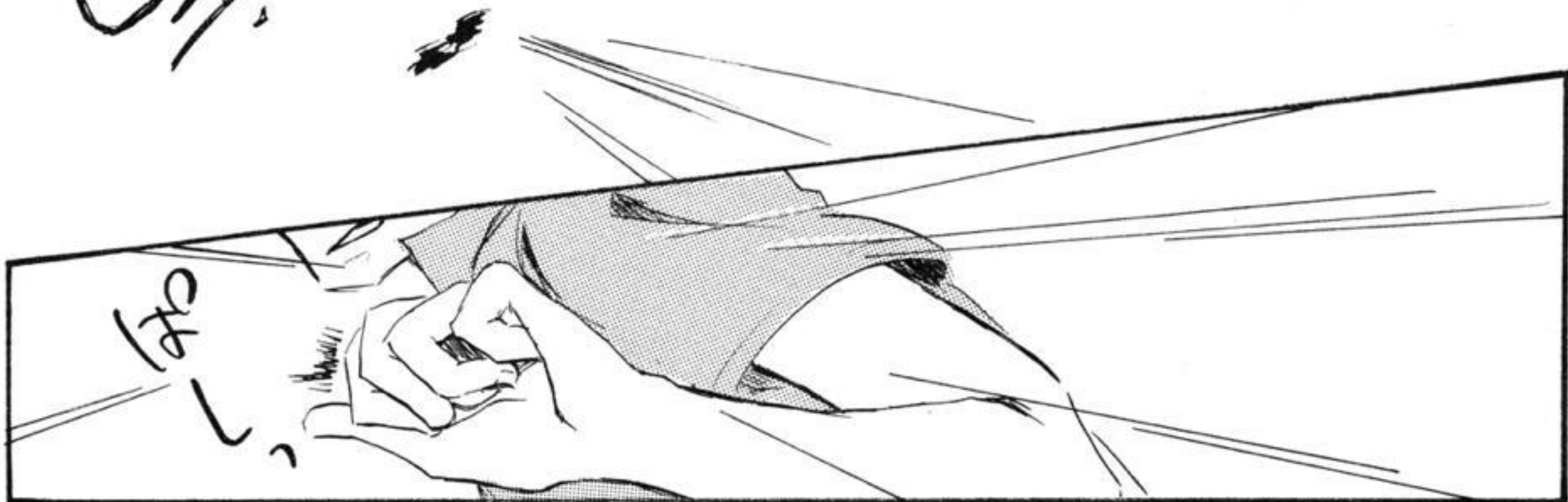


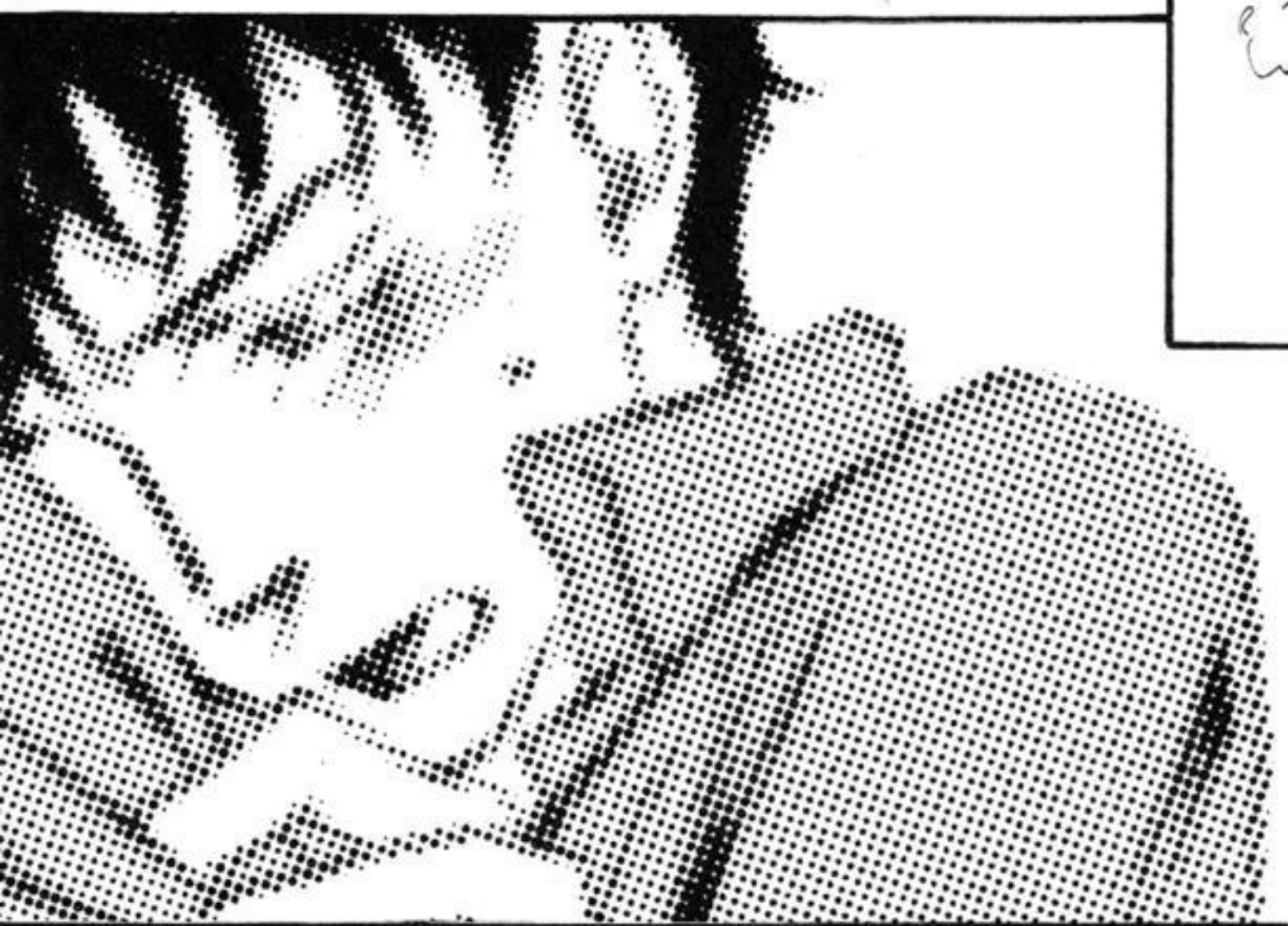
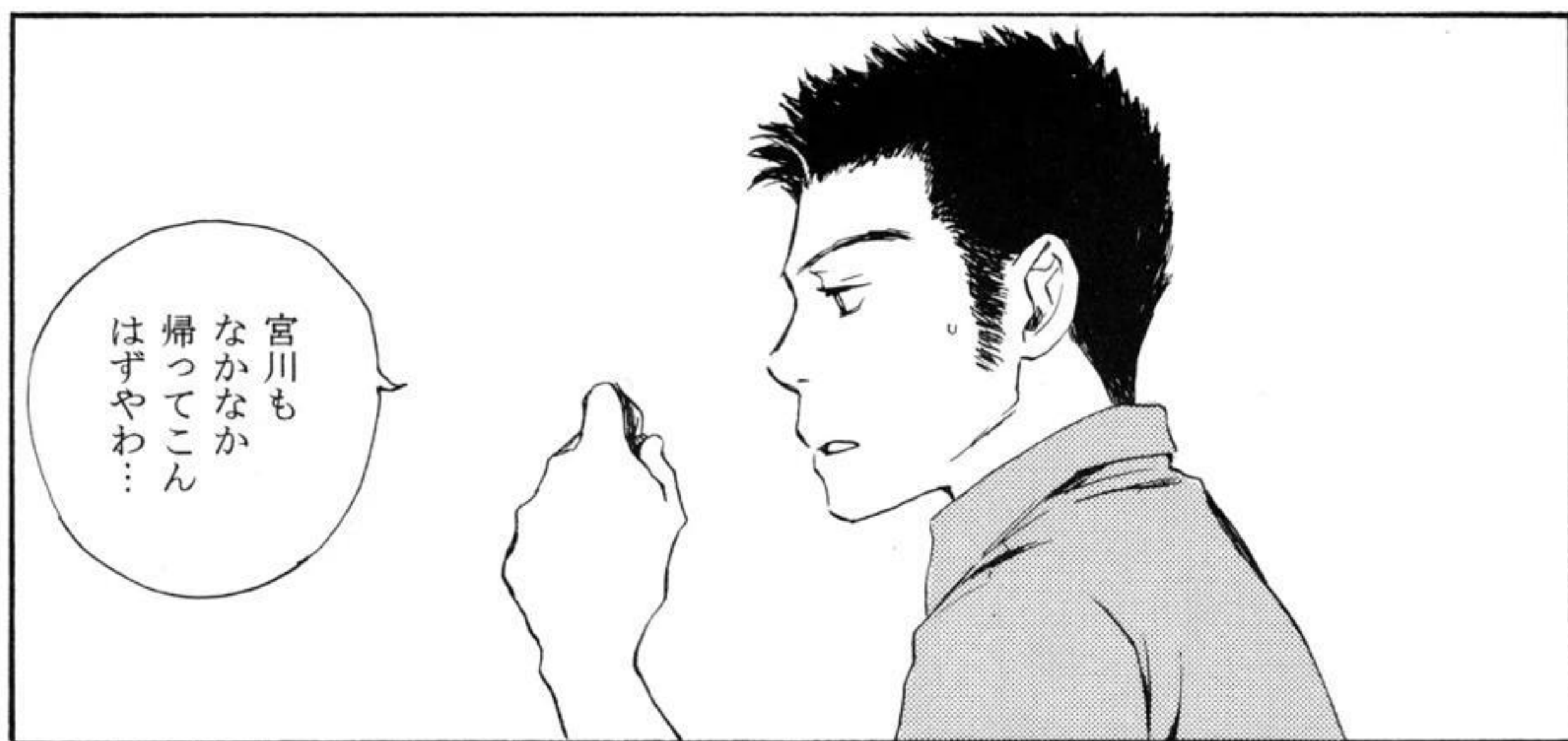






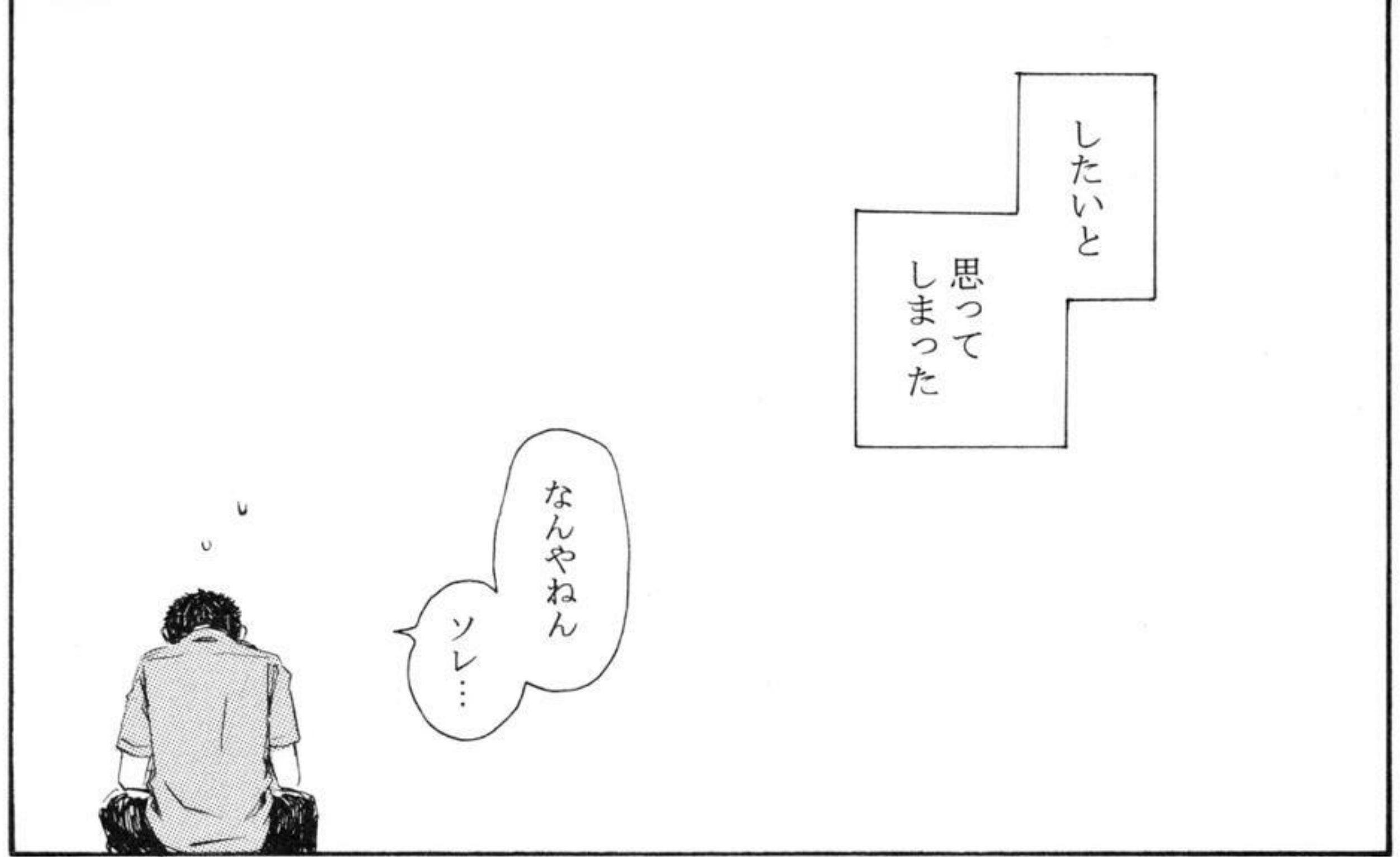






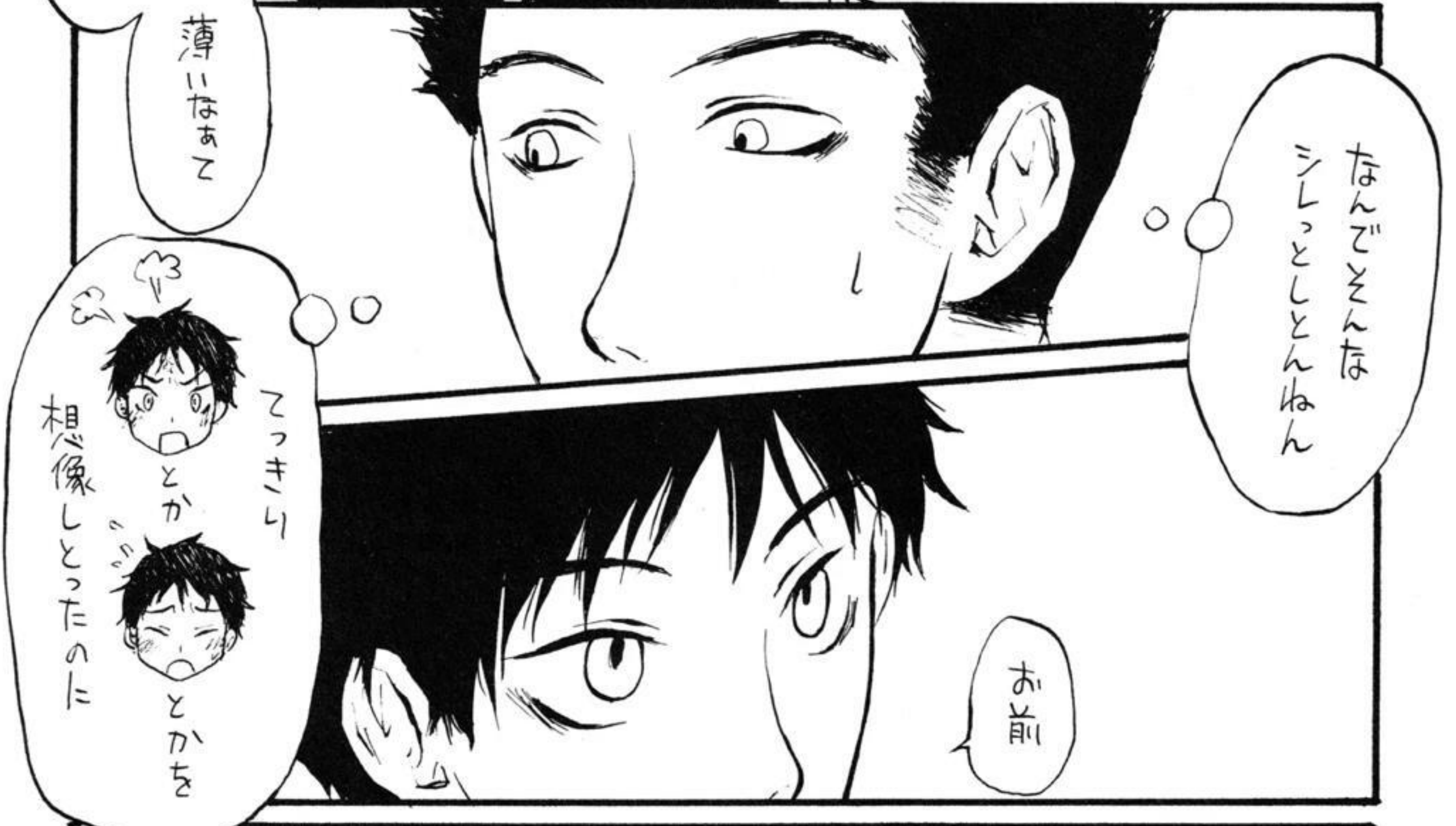
『織田…』

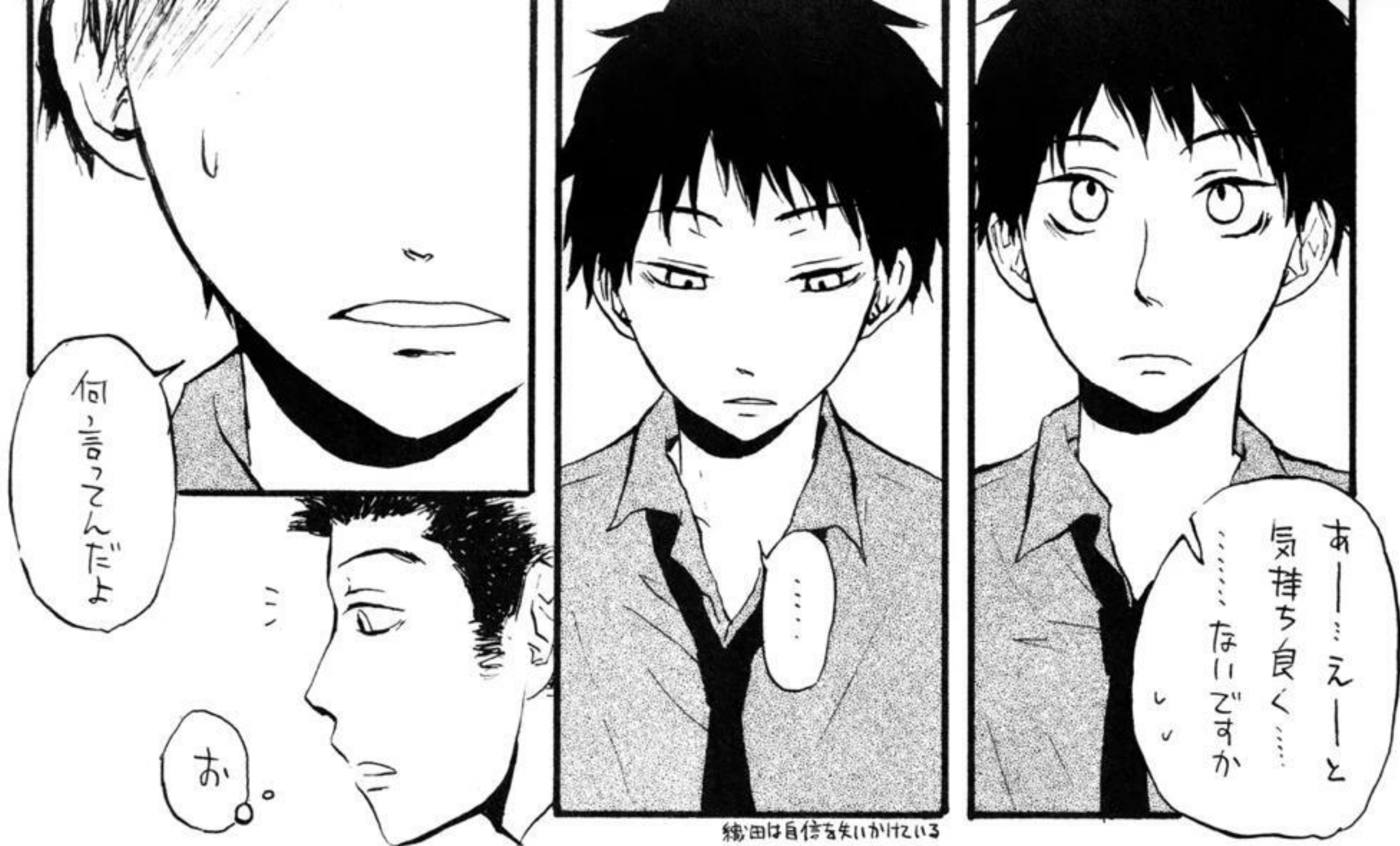




おわり。

<<GUESTS





綾田は自信を失いかけている



綾田は自信を取り戻した

まゐご

反応が

あんまりびくくりして
止まってもうたんやな

ああそうか

あいつ!!

でも今止める方が
辛いんちゃう?

織ミッ!!

あ

なて

ネコみたいで
可愛いなあ!!



うーん
あかん
ハマるかも
しれん...



グラビアアイドルかのたん。ナカココ

ってあれ
おれへんわ

すれちがって
もうたかな…

ん？

か
ち
や

叶
おい

雑誌か？

高校雑誌
I

し

い

叶の机上に
ちよっぴり
Hな本が…！

ぐわんぐわん…

一人の時に
こっそり

こんなこと
しちゃったい!?



うゝわゝ!
なんて破廉恥
なんや!

しら?

おわっ!
かつ...叶!

くう!!

それ先輩
忘れ物
だよ

びん

グラビアで
大興奮って
飢えてんなあ
織田...

そっちちゃう
なんて言え
ない織田だった

何が?





起立、礼、着席。

織田は、薄い学生靴を提げて立ち上がった。中身のろくに入っていない革靴ひとつでは、軽すぎて歩きにくささえ感じる。いつもなら、この他に三星学園の派手なロゴの入ったポストンバッグもあるのだが、中間試験前で部活は休み。

バットの握れない放課後を、さてどうするかと考えながら歩き出す。

「おだつ」

机から離れかけた織田を、怒鳴り声が引き止めた。振り向くと、叶が、黒板近くから早足に歩み寄ってきていた。

「なんや、叶」

「地理のプリント」

叶が、織田の真正面に立って、ぐいと見上げてくる。吊り気味の大きな目が織田を睨みつける。否、本人は睨んでいるつもりはなく、ただ見上げているだけなのだが、やけに真っ直ぐな視線と、妙に迫力のある目でそうするので、見られた方は射竦められたように感じてしまう。

まあ、もう慣れたけど。と、織田は心中でひとりごちた。

「プリントがどうかしたんか？」

「見せて」

「…叶、人にモノを頼むときは、もうちょいなあ」

「オレ、寝てて全然写してねーんだよ」

「いや、おまえが教室と真ん中まん前で毎日毎日、寝こけてんのは知ってるけどな？」

「だから、見せて」

さあどうだと言わんばかりな、堂々とした叶の態度には、いつそ頭が下がる。織田は、叶から『お願いします』という台詞を引き出すことを諦めた。

「なんでオレやねん。畠の方が、ちゃんとノートとってるやろ」

「あいつ、世界史だろ。株も世界史。宮川は地理だけど間違っつて写してるし、吉はプリント失くしたって」

「自分ら揃いも揃って」

「いいから、早くしろよ」

「…なんで半ギレやねん」

織田は、鞆を開いて中を探った。

「あー、今日から新しいプリントやったから、古いの持って来てへんわ。いつの要るん」

「熱帯とかのやつから、今日まで」

「全部やんけ…!」

「叶! 行かないのか畠ん家」

叶を呼ぶ声が聞こえて、視線を上げる。教室の前の入り口に、野球部の内組が集まっている。普段、叶の周囲を取り巻いているメンバーだ。

叶は、くると振り返って声を上げた。

「オレ、織田の部屋へ寄ってくから」

「はっ? なんでオレの部屋来んの、叶」

「なんでって、取りに行かないと無いんだろ」

疑問を口にした織田を、叶が訝しげに見上げる。

畠が、グループの中から一歩前に出た。

「オレら、待つてようか。すぐだろ」

叶は、畠に顔を向けて、首を振った。

「いい。どうせ、おまえん家へ行ったらテスト勉強だろ」

「何言つてんだよ。叶が一番わかんねーとこだらけなんだぞ」

「いいんだよ!」

畠は叶を見て、織田を見て、叶に目を戻す。

「…じゃあ、来る気になったら、みんなでおれん家いるから。場所、わかるよな」

「わかるわかる。じゃあな!」

叶が背を向けると、畠たちは諦めたようにぞろぞろと教室を出て行った。

織田は、首を竦めた。

「叶ちゃん、畠くん心配してくれてんのに、邪険にしたらアカンで!」

「邪険になんかしてねーよ。オレらも行くぞ」

平気な顔で言いやって、叶がさっさと歩き出す。

織田は、パチンと鞆を閉めた。

「だいたいなあ。ちゃんと教科書読んだら、埋められるカッコばっかりやねんで?」

デスクを掻き回す織田を尻目に、叶は勝手にベッドへ座り込む。

「教科書、どっか行つた」

「なんでやねん…」

「いいだろ、プリント見せるくらい。減るわけじゃねえし」

「おまえを相手にしたら、オレのガラスのハートが磨り減るわ」

「みんな二人部屋なのに、織田だけ一人でいいよな」

「ぼすん、という音がして織田はベッドを振り返った。叶が、大の字になって寝転んでいる。」

「叶、他人の部屋やねんから遠慮せんかい」

「特待生はいいよなあ」

織田を見上げる叶の顔に、プリントの束をばさばさ降らせる。

「わぶ」

「ほら、早よ写せ。コピーすんねやったら管理室」

「ええー、オレ、コピーする金無い」

「じゃあ、早く写せ」

「めんどい」

「知らんわ! やらへんぞ、オレの勉強もあんねんから」

「えつ、織田、べんきよーすんのっ?」

叶が、心底驚いたような顔をして起き上がる。織田は、眉を顰めた。

「するわ。赤点取つたら、特待剥奪や」

「そんなのあのかよ。おお、プリントもまじでちゃんと書いてある」

「当たり前じゃ。オレはおまえと違って、文武両道まじめな優等生や」

「へえ、オレ、スポ特は勉強しなくていいのかと思つてた。織田、おまえ、えらいな」

叶が、織田を見上げて真顔で言う。心底、感心しているらしい様子に、織

田は思わず言葉に詰まった。

そんな織田を置いて、叶はプリントを眺める。苦虫を噛み潰したように、顔を歪めて。

「いち、に、さん、し、…うわ、九枚もあるし」

「最初っからやってない、おまえが悪い」

「織田あ、コピー代くれ」

「せめて、貸せって言えや」

「だって返さねーもん、たぶん。いいだろ、九十円ばっち」

「ぼっちで言うなら、自分で払え」

「ケチくせえな」

「…プリント、返さんかい」

叶の手から、プリントの束をもぎ取る。叶が、睨み上げる。

「なにすんだよッ！」

「人の親切をありがたがらん奴には、貸さへん」

織田は、ベッドから数歩離れると、プリントを持った手を頭の上に伸ばした。にやりと笑ってみせる。

「ほれ、おちびちゃん。取れるもんなら、取ってみい」

その途端、叶の顔に血が上った。織田を睨みつける目がぎらぎらと光る。叶はベッドに立ち上がると、ぐつと腰をかがめた。あつと思つ間もなく、叶の体が伸び上がる。ベッドから一メートル離れた織田の頭上をめがけて飛びつく。

「うおおッ！」

織田の目の前に、叶のネクタイが押し迫る。

全力のジャンプにぶつかられて、織田は背中から床に落ちた。その上に、叶の体が降ってくる。二人分の体重を受け止めた床が、派手な音を響かせた。背中と腹とに衝撃を受けて、織田が噎せ返る。一瞬白く霞んだ眼前に、わら半紙が突き付けられる。見上げると、織田の腹の上に跨って、叶が笑っていた。

「取ったぜ」

さあ褒めろ、とでも言うような得意げな顔に、織田はため息をついた。

「飛び掛るてどないやねん、自分」

「なんだよ、取ってみろって言ったのは織田だろ」

「あー、はい、さようでした。ええわもう、持ってけ」

織田がげっそりと言うと、叶は機嫌良さそうに目を細めた。織田の上に跨ったまま、自分がくしゃくしゃにしたプリントの皺を伸ばしている。

織田は、眉をひそめた。

「おい、叶。いつまで乗っこんねん」

叶は聞いていないらしく、織田の顔を覗き込む。

「なあ、織田。コピー代が無い」

「プリント持っててええって。やるわもう」

「は？ それじゃ、織田が勉強できねえだろ」

「教科書を地道に読むわー」

「そんなの大変じゃん。特待かかってんのに」

叶の眉間が、きゅつと狭められる。織田の顔を見下ろして、睨みつける。否、睨んでいるのでは無い。織田を見詰めて、何か一生懸命考えているのだ。妙な緊迫感を持った沈黙に、織田もつい黙り込む。

ふと、叶の眉間が少し緩んだかと思つと、ゆつくりと織田の上に被さった。叶の小さな顔が、織田の顔に重なる。薄い唇が織田の唇に触れて、ちゅ、と一度吸い付く。

再び離れた叶が、真顔で言った。

「コピー代」

織田は、目を見張った。叶は真顔のまま、微塵も視線を揺るがせない。その目を見返して、動かない頭の中を何とか回らせる。

「それは、何や、叶のキスを九十円で買えってことか？」

「そう」

すっと頷かれて、織田は思わず頭を抱えた。

「…修悟、お母ちゃんは、そんな身売りみたいなことする子に育てた覚えはありません…」

「育てられた覚えも無えよ。てゆか、さあ。いつも、キスしようと思つても、織田ア力いから届かねえんだもん。見下ろして出来るのって、今しかな

いじゃん」

思わず目を丸くして見上げると、叶が、笑みの形に目を細めた。舌なめずりする猫のように、ぺろりと舌を出す。

「七回目にして、やっと成功」

織田は、間抜けなほどに目を見開いた。

眉をしかめて、一度、目を瞑り。

それから、見上げる。

「叶、オレは一年間赤点を免れないと、特待の資格無くなるねん」

「さっき聞いた」

「やからな、こんなことしてる暇ないんやで」

「え、うわっ」

叶の腕を掴んで、自分の上に引き倒す。手のひらで後頭部を鷲掴みにして、押さえ付ける。落ちてきた唇を、唇で受け止め舌で割り開く。丸飲みに出来そうな、細い顎と薄い唇。

「…ん、ぐ…ッ」

もがく叶の体を、頭を押さえる左手ひとつで抑え込む。右手で、制服のネクタイを外してやり、シャツを開く。勢いに任せて、ベルトも引き抜く。薄く目を開くと、睨みつける叶の目が四センチ先に見えた。

「おだ…ッ」

口づけの隙間になじる声を、舌で絡め取る。口内の叶の舌を探ると、逃げればいいものを挑むように絡め返してくる。どちらのものとも言えない唾液が、喉に流れ込む。織田は、自分のネクタイも外した。

織田の肩を滅茶苦茶に叩いていた叶の手は、いつの間にか、拳を握ったまま胸の上でおとなしくなっている。息継ぎの隙間に吐き出される言葉も弱くなり、小さな呻き声と荒れた呼吸の音しか聞こえない。

織田は、右手を叶の喉に滑らせた。くすぐるように鎖骨を下りて、平らな

胸板を辿る。小さな突起を、爪の先で一度、引っ搔く。

「く…っ」

叶の声が、鼻に抜けて漏れる。織田が左手を少し緩めると、唇が離れて、叶が大きく息を吐く。

織田は、思わず短く笑った。

「ようさん見下ろしてキスできて、よかったなあ」

「てめえ」

叶の赤らんだ目元が、睨み下ろしてくる。蛍光灯の逆光で薄暗い顔の中、大きな目だけがちらちらと光っている。

織田は右手の指を、叶の口元へと差し出した。

「ほら、舐め」

叶は、口を真一文字に結んでいる。その唇を爪の先でなぞり、合わせ目をつつく。左手は、叶の胸元に這わせ、硬くなり始めている突起を再びくすぐった。ん、と短く呻いた叶の唇が僅かに緩み、その隙間へ中指を当てる。

叶の大きな目が伏せられて、織田の指を口の中へ咥え込んだ。

「えらいえらい。いっぱい舐めるんやで」

あやすように言つと、叶が細く目を開いて睨んでくる。咥え込んだ織田の指を、奥歯でこりこりと噛んだ。

口づけするのが七回目なら、こんな風に二人きりなのは何回目だろうか。いつの間にか、毎週のようにこんなことをしている。いつもいつも盛っているつもりは無いのに、気づけば体が重なっている。どちらが誘っているわけでも、迫っているわけでも無いのに。

中指から始まって、人差し指を差し込み、薬指を押し込む。口いっぱいになった叶が、息苦しそうに眉を寄せる。下を向いて舐めているせいか、溢れる唾液が指を伝って、手首まで濡らした。

左手で、叶の充血した胸の突起をくすぐる。摘んで、捻って、引っ搔く。その度に、叶はぎくりと肩を竦めた。ときどき目を開いて織田を睨み下ろし、また引っ搔かれて、きゅっと目を瞑る。

織田は、左手をさらに下へと滑らせた。叶のファスナーを下ろし、下着ごとズボンを太腿まで引き下ろす。織田の腹の上で、叶が身を硬くするのに構

いもせず、剥き出しになった中心を握り込む。

「…ッ」

叶が、息を飲んだ。織田が、握り込んだ手をゆるゆると動かすと、ふっと荒く息を吐く。

「キモチイイのはこれからやで」

叶の口から、右手を抜く。赤い舌がちらりと見えて、織田は、腰が疼くのを感じた。

唾液にまみれた指を、叶の後ろへと回す。尾てい骨を探り、割れ目へと下ろしていく。嚙まれた穴へと、抵抗にも構わず指の先を押し込む。まずは中指だけ、第一関節まで差し込んで、ぐるりと捻る。

「うあッ！」

びくん、と叶の体が跳ねる。宥めるように性器を扱きながら、中指を根元まで押し込んでいく。締め付ける内壁を、押し広げるように指を捻る。出し入れを繰り返しながら、人差し指を足し、薬指を捻し込む。

「ん、あ、ぐ…ウ！」

織田の胸の上で、叶の体を支える手のひらが震えている。びくりと跳ね上がる肩にあわせて、痙攣するようにぎゅっと握られる。

「イイ？」

織田の声に、叶は縦とも横ともつかないように首を振った。身を縮め、顔を伏せる。時折、顎を仰け反らせる。

織田は、叶の性器から手を離れた。体内に挿しこんだ指を、根元まで押し込んで掻き混ぜる。

「…おだ…ッ」

荒い息に紛れて、叶が呼ぶ。丁寧に並んだ歯を食いしばり、湿った呼吸を漏らす。睨み下ろす大きな目が、濡れていた。

こんな顔をする癖に、普段は平気で、何事も無いように振舞ってみせる。以前と変わらず畠たちに囲まれて、たまに、用事があれば織田に声をかける。特に親密になるわけではなく、逆に避けるわけでもない。

それが演技なのだとしたら、叶は大した役者だと、織田は思う。それとも、今こうして喘いでみせるのが演技なのか。

織田は短く笑って、右手は叶の中を挟みながら、左手で自分のファスナーを下ろした。窮屈で仕方なかった性器が、叶の後ろで起き上がる。

「叶、ちよつとバック」

叶が、ちらりと眉をしかめる。訝しげにしながら、腹の上から腰の上へと後退り、割れ目に織田の先端が触れて、ぎくりと動きを止めた。

織田は、緩く目を細めた。叶の体から、指を抜く。

「腰、上げや。自分で入れれるやろ？」

「…てめ…え」

叶の顔に、ざつと朱が走る。ほら、と急かすように突付いてやると、叶の目がきつくなる。薄笑いを浮かべる織田を見ると、挑むような光を浮かべる。叶の手が、織田の性器を後ろ手に握った。肩越しに振り返りながら、先端をひくつく箇所当てる。呼吸を整えるように、二度、大きく息を吐いた。ずくり、と飲み込む。

「あアッ！」

叶が、背中を仰け反らせる。

織田は、顔をしかめた。両手で腰を支えてやり、ゆつくりと叶の体を下ろしていく。ぎちぎちと体を沈ませて、根元まで辿り着く。叶の性器から、織田のシャツへと先走りが糸を引いて落ちた。

「あ、ウあ、あ…」

「叶、声を抑ええや。聞かれたら、かなわん」

「わかつ、てるよ」

太腿までしか下ろせないズボンに縛られて、叶が窮屈そうに脚を動かす。ごそごそと、落ち着かなさげにフローリングを足で掻いていたが、やがて諦めたように座り込んだ。

その体へと、腰を突き上げる。

「うあ…ッ！」

叶の叫び声に、織田は眉をひそめた。

「叶、コエ」

「…声出たらまずいなら、おまえ、動くな…ッ」
「動かんかったら、ヨクならへんやろ」

「自分で、出来る」

やけにはつきりとした叶の言葉に、織田は叶を見上げた。

叶は、目を細めて織田を見詰めていた。

どこまで正気で、どこまでが偽りなのか読めない。織田の知る叶は、打算的に何かを偽るような人間では決して無い。だが、全てが正気なのだとしたら、ますますわからなくなる。

正気で、こんなことができるのか。できるとしたら、何故なのか。できないとしたら、この状況は何だ。

「こんなん、畠らが見たら、腰抜かすで」

織田が、ぽつりと呟いた途端、叶の顔が険しくなる。

「…関係ねえよ」

唐突に顔をしかめた叶が見えて、織田は思わず少し笑った。

この発言は、正気らしい。

「畠くんらは、今頃勉強してんのかな。叶ちゃんの心配しながら」

「関係、無えってんだろ」

叶が目を伏せて、顎を引く。眉間を寄せて、ふると首を振る。腰の角度を変えて前後に膝を揺らすと、フローリングに膝が擦れて、かすかな音を立て始めた。

織田の上で体を揺らす、叶の細い顎を透明な汗の筋が滑り落ちてくる。指を伸ばして、落ちそうにならずくを拾い上げる。気づいた叶が、その指先をべろと舐めた。

わからないのは自分の方か、と織田は奥歯を噛む。叶を抱いているのは自分で、指先を伝う叶の舌の感触に欲情しているのも自分。間違いなく正気なのに、かなり本気でこんなことをしているのは、何故なのか。改めて考えると、思考が靄に埋もれる。

ぐうつと叶が腰を沈めて、織田は顔を歪めて堪えた。飲み込んだ織田のものを、内壁が締め付ける。

「叶、うまなっただなあ…」

締め上げ、擦り上げるような感覚に呟くと、叶が、ふうつと大きく息を吐き、薄く目を開いて織田を見た。

「…畠に、同情してる場合かよ」

見上げた織田に向かって、叶は笑ってみせた。

「そんな余裕、ねえだろ」

「ほざけ」

織田は、横たわっていた上半身を起こした。腰の上で、叶が後ろへバランスを崩す。そのまま、床へと押し倒す。繋がったままの急な動作で、叶が呟いた。その口を、顎ごと手のひらで一掴みに塞ぐ。

「さて、マジになろか」

手のひらの下で、叶の顎が仰け反った。

name: 嘉戸ショーコ

url: <http://himegusuku.boo.jp/>

お誘い有難うございました。貴重な体験でした。笑
はるにゃが大好き嘉戸でした。お二人がどんな凄いマンガを描かれているのか今から恐ろしく楽しみです。ハアハア

Re: やっぱー理想のかのにゃんが来ちゃって軽く織田に嫉妬です。フリーズかのにゃんにそのまま色々しちゃわない織田も理想の旦那像で大変愛おしいです。え？しちゃってる？ ありがとうありがとう。 皆川

Re: 原稿いただいたのが前すぎてもはやどうやってあなたからゲストをもぎとったのかよく覚えていませんが(すみません)、とりあえずその頃の私、グッジョブ！と言ってやりたい。カドさんのぼーいずらぶは恥ずかしくて最高だと思うわけで！ハアハア 恵

name: ナカノココロ

url: <http://www.mercury.sannet.ne.jp/kky-nakano/>

他ジャンル者が乱入すみません。かのにゃん沢山と描くと意気込んでたら半分織田君でした…おかしいな…！おだかの万歳★余談ですがこれを描いている時に父が二度も部屋に入ってきました…にこり…！

Re: 織田が可愛いわけで(※叶受け本)ほんで突っ込むべきところは靴下だと思われ
ます。織田の妄想の中の白靴下という辺りがやや変態的且つ叙情的です。男の
ロマン。お父さんゴメン。 皆川

Re: お父さまに見られてまずいものを描かせてすみません。ノルマはワンチンで！とか言
ってごめん。守ってくれてありがとう！汁もありがとう！ティッシュってすごい妄想小道具
具が来ちゃった！と思いました。エヘ 恵

name: イトチ

url: <http://ozaki.fc2web.com/itoch/>

場違いになる気まんまんです！（涙目）
サブタイトルは、マジで恋する5秒前、で。

Re: うっかり表紙に偽りありになるところイトチのおかげで立派な年齢制限本になりました。
多謝。織田が頑張っていて感動です。イトチ先生には是非とも24禁(純禁)くらい
の本を期待してます。ね。 皆川

Re: 「かのだんと織田は猫とキャットタワー」という発言の謎がゲスト稿を読んで解けまし
た。興奮した猫のように見境ないかのだんハアハア…！これから本番とか言われて
もそれは何禁ですか！ 恵

最後までお付き合い有難うございます。大分疲れの出てきた後記担当、皆川マヒワです。

三星は叶女王様以下は全員Mだと思ってたんですが、叶の「さからわねエけどさ」の一言で（あと「バカ畠」）何だこのやろうお前もMなのかよと、かくして私の中で三星のMは総じてマゾっこのMになったわけです。なんてことを恵さんと話していたら、もう叶は突っ込まれて悦ぶ子で良くない？ などと失礼な運びになり「ちょっと痛くされた方が好き」とかいう不名誉なオプションまでついて今に至ります。痛くされた方が好きなガキ大将ってちょっと凄いな。とはいえ本編にはあまり反映されませんでした（乗っかり禁くらい）

恵先輩が突っ込んでないと聞きショックを受けつつ、自分は自分で不慣れ丸出しですが過ぎたことは忘れて明日を目指そうと思います。うん前向き大事。エロむずい。

なんもしね一皆川を引っ張ってくれた恵さんと遊びに来てくれたゲストのお三方、それから不審なこの本（特に裏表紙が）を手にとってくれたみなさんに心からの感謝の気持ちを。ありがとう大好きです。

皆川マヒワでした

Post-

Shake up

Shake up

20050109

minagawa mahiwa (<http://www.ne.jp/asahi/21/mahiwa/350ml/>)
& megumi nene (<http://www.cute.to/~m-g/krkr/>)

R-15

この本は同人誌です。

版權元とは関係ありません。

無断転載、

ネットオークション等への出品はご遠慮下さい。



Minagawa Mahiwa/21
Megumi Nene/Bell hound
Shake up/20050109

Special Thanks
Itochi
Kado Shoko
Nakano Cocoro

x Kano Shugo

~~15~~